

読書雑感

岡本綺堂

青空文庫

何といつてもこの頃は読書子に取つては恵まれた時代である。円本は勿論、改造文庫、岩波文庫、春陽堂文庫のたぐい、二十銭か三十銭で自分の読みたい本が自由に読まれるというのは、どう考えても有^{ありがた}難いことである。

趣味からいえば、廉価版の安っぽい書物は感じが悪いという。それも一応はもつともであるが、読書趣味の普及された時代、本を読みたくても金がないという人々に取つては、廉価版は確^{たしか}に必要である。また、著者としても、豪華版を作つて少数の人に読まれるよりも、廉価版を作つて多数の人に読まれた方がよい。五百人六百人に読まれるよりも、一人二人に読まれた方が、著者としては本懐でなければならぬ。

それに付けても、わたしたちの若い時代に比べると、当世の若い人たちは確に恵まれていると思う。わたしは明治五年の生れで、十七、八歳即ち明治二十一、二年頃から、三十歳前後即ち明治三十四、五年頃までが、最も多くの書を読んだ時代であつたが、その頃は勿論廉価版などというものはない。第一に古書の翻刻が甚だ少い。

したがつて、古書を読もうとするには江戸時代の原本を尋ねなければならぬ。その原本は少い上に、価も廉^{やす}くない。わたしは神田の三久（三河屋久兵衛）という古本屋へしば

しばひやかしに行つたが、貧乏書生の悲しさ、読みたい本を見付けても容易に買うことが出来ないのであつた。金さえあれば、おれも学者になれるのだと思つたが、それがどうにもならなかつた。

わたしにかぎらず、原本は容易に獲られず、その価もまた廉くない関係から、その時代には書物の借覧ということが行われた。蔵書家に就てその蔵書を借り出して来るのである。ところが、蔵書家には門外不出を標榜している人が多く、自宅へ来て読むというならば読ませて遣^やるが、貸出しは一切断るといふのである。そうなると、その家を訪問して読ませてもらふのほかはない。

日曜日のほかに余暇のないわたしは、それからそれへと紹介を求めて諸家を訪問することになつたが、それが随分難儀な仕事であつた。由来、蔵書家というような人たちは、東京のまん中にあまり多く住んでいない。大抵は場末の不便なところに住んでいる。電車の便などのない時代に、本郷小石川や本所深川辺まで尋ねて行くことになる、その往復だけでも相当の時間を費してしまふので、肝腎の読書の時間が案外に少いことになるには頗^{すこぶ}る困つた。

なにしろ馴染^{なじみ}の浅い家へ行つて、悠々と坐り込んで書物を読んでいるのは心苦しいこと

である。蔵書家といつても、広い家に住んでいるとは限らないから、時には玄関の二畳ぐらしいの処に坐つて読まされる。時にはまた、立派な座敷へ通されて恐縮することもある。

腰弁当で出かけても、碌ろくろく々に茶も飲ませてくれない家がある。そうかと思うと、茶や菓子を出して、おまけに鰻飯などを喰わせてくれる家がある。その待遇は千差万別で、冷遇はいささか不平であるが、優待もあまりに気の毒でたびたび出かけるのを遠慮するようにもなる。冷遇も困るが、優待も困る。その加減がどうもむずかしいのであった。

そのあいだには、上野の図書館へも通つたが、やはり特別の書物を読もうとすると、蔵書家をたずねる必要が生ずるので、わたしは前にいうような冷遇と優待を受けながら、根よく方々をたずね廻つた。ただ読んでいるばかりでは済まない。時には抜き書きをすることもある。万年筆などのない時代であるから、矢立やたてと罫紙を持参で出かける。そうした思ひ出のある抜き書き類も、先年の震災でみな灰となつてしまった。

そういう時代に、博文館から日本文学全書、温知叢書、帝国文庫等の翻刻物を出してくれたのは、我々に取つて一種の福音であつた。勿論、ありふれた物ばかりで、別に珍奇の書は見出されなかつたが、それらの書物を自分の座右に備え付けておかれるというだけでも、確に有難いことであつた。

その後、古書の飜刻も続々行われ、わたしの懐にも幾分の余裕が出来て、買いたい本はどうか買えるようにもなったが、その昔の読書の苦しみは身にしみて覚えている。わたしはその経験があるだけに、書物の装幀などにはあまり重きを置かない。なんでも安く買えて、それを自分の手もとに置くことの出来るのを第一義としている。

前にもいう通り、わたしが矢立と罫紙を持って、風雨を冒して郊外の蔵書家を訪問して、一生懸命に筆写して来た書物が、今日では何々文庫として二十銭か三十銭で容易に手に入る事が出来るのは、読書子に取って実に幸福であるといわなければならない。廉価版が善い悪いのと贅沢をいうべきではない。

博文館以外にも、その当時に古書を飜刻してくれた人たちは、その目的が那邊にあらうとも、我々に取っては皆忘れ難い恩人であった。その人々も今は大かたこの世にいないであらう。その書物も次第に埋滅いんめつして、今は古本屋の店頭にもその形をとどめなくなった。わたしもその飜刻書類を随分蒐集していたが、それもみな震災の犠牲になってしまったのは残り惜しい。

わたしは比較的に好運の人間で、これまでにあまりひどい目に逢ったこともなかったが、震災のために、多年の日記、雑記帳、原稿のたぐいから蔵書一切を焼き失ったのは、一生

一度の償い難き災禍であった。この恨は綿々として尽きない。

青空文庫情報

底本：「岡本綺堂随筆集」岩波文庫、岩波書店

2007（平成19）年10月16日第1刷発行

2008（平成20）年5月23日第4刷発行

底本の親本：「猫やなぎ」岡倉書房

1934（昭和9）年4月初版発行

初出：「書物展望」

1933（昭和8）年3月号

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年11月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

読書雑感

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>